

# 創立記念日特集

2016年10月29日

総務課

昭和12年、時の大蔵大臣・結城豊太郎(山形中学9回・明治29年卒)が母校を訪問し、三つの土産を残していかれました。この夏、その一つである「奉公旗」を調査のために開いてみました。80年の時を経たとは思えぬ鮮やかな墨痕、力強い筆致。創立まもない山形中学での青春時代にまでさかのぼりつつ、三つの土産に託した結城の胸中に思いをはせてみましょう。

(現在の奉公旗)



## 山東132年史・大蔵大臣の置き土産

### 戦争前夜、一本の白旗に託した思い

一九三七年(昭和12)二月、林銑十郎内閣が発足し、結城豊太郎が大蔵大臣兼拓務大臣(植民地行政を統轄)兼企画庁総裁として就任した。五月、故郷赤湯に帰った結城は、翌二十五日、本校初の大蔵大臣として母校の門をくぐった。

結城の訪問に敬意を表して、校庭では閲兵式が行われた。配属将校の指揮の下、全校生徒による一糸乱れぬ行列行進は日頃の訓練の成果を存分に表していた。次いで場所を講堂に移し、講演が行われる手はずになっていた。

正面に「孝義」の額が掲げられ、整然と長椅子が並んだ講堂。結城がここで講演をするのは、二度目だった。

一九二四年(大正13)七月十九日、創立四十周年記念式典。当時、安田銀行副頭取だった結城は、講師として壇上に立った。この日初めて披露された土井晚翠作詞、中田章作曲の新しい校歌。「羽前の三山」と声高らかに歌った生徒達の目が、一斉に注がれた。炎熱焼くが如き晴天、立錫の余地もない講堂で、生徒達は、「貨幣価値の下落について」と題する講演を熱心に聴いてくれた。

あれから、わずか十年余り。世界恐慌に端を発したフアジズムの台頭は、山形中学にも深く影を落としていた。

一九二五年(大正14)、軍事教練の開始、陸軍の実弾射撃訓練への参加。一九三二年(昭和7)、軍港横須賀への修学旅行、「軍艦「長門」艦上での記念撮影。一九三五年(昭和10)、山中喇叭隊(ランパと號したる軍隊)の創設。今日のような閲兵行進をはじめ、戦勝記念、戦旗祭、出征兵士の壮行と活躍の場は広がる一方だった。生徒達は編上げ靴にゲートル(蕙の鞭)をつけ、先輩への挨拶も脱帽から軍隊式の挙手の礼へと変わっていった。

時を同じくして、本校では近代スポーツが推奨され、「文武両道」の新たな校風が芽吹き始めていた。籠球部の全国準優勝、庭球部の全国制覇に続き、一九三六年(昭和11)ついに野球部が甲子園初出場。全国に「山形中学」の名を轟かせる黄金時代の到来だった。

壇上でにこやかに話を進めていた結城は、話題をふと『論語』に移した。

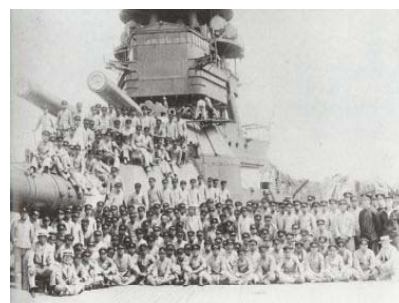
「朋あり遠方より来る亦楽しからずやと云う言葉があるが、これは御土産を持って来てくれるから又楽しいので、私も何か御土産を持って来なければ弟達に合わせる顔がないので、これを持って来ました。」

ユーモラスな上に思いがけない話に、みな注目する中で、結城は一本の白地の旗を戸田貫一校長に贈った。一面には「奉公」、他面にはBoys! Be Ambitious とクランク博士の言葉が墨書してあった。お国のために尽くす奉公の精神と、進取果敢にして不屈な自立の精神と。その二つを、結城は若者達に託したのだった。

一九四一年(昭和16)真珠湾攻撃により太平洋戦争勃発。英語は敵国語として排斥され、暗く「奉公」一色に塗り込められる時代が、もう目前まで迫っていた。



結城豊太郎



長門艦上にて(1932年)



甲子園開会式(1936年)



講演者は小磯国昭拓務大臣



奉公旗の表側

奉公旗 写真撮影時(1939年)

\*奉公旗に一滴  
奉公旗にまつわるうちあけ話  
『奉公』を書いた時墨がボツンと落ちた。その処置に困り何か埋めてやらうとして埋めた。閣議で署名する時の字である。閣議では判を用ひず書判する。私はそんな文字を知らないのでありますから一つの型破りであるが私の署名は豊の字である。この署名を墨の落ちた所にしたのであります。」  
(「講演速記録」より)

# バンカラと経済学書と中原先生

この日の列席者の中に、結城が山形中学に在籍していた当時の校長・中原貞七の姿があった。八十一歳の高齡をおして、講演の前座をつとめてくれた。「懐かしき我が中学校」と題する結城の回顧録には、師との深い絆が語られている。

僕の第二の故郷、山形の五ヶ年を顧みると、唯師恩と友誼とに拠つて、僕といふ人間が大部分作られたかと思ふ。中原先生の教化は殊に忘るべからざるものがある。僕は小学校に在つて、浅間新五郎先生と、須藤信立先生との感化を受けること多く其時分に培はれたと共に、僕の人生観は高等学校時代（**旧第一高等学校**、**聖の聖**）に山田郁治先生の倫理学に負ふところ少なくないが、僕をして銀行をやらうといふ志を立てさせたのは、どうも中原先生のホーセツト夫人（二四七年、**英皇**、**盲易辨著**・**ヘンリー・フォセツトの妻**、一八七〇年襲の「初志考のための政治経済」は学生向けの経済学原教科書として人気を博した）の経済書に依ること頗る多いやうに思ふ。へ 中略 へ僕が高等学校に入つて二年のときと思ふ、山形中学の生徒が\*ストライキをやつたことがある。其指揮者がかくいふ僕で、仙台から電報一本で一斉にストライキをやつたものだ。僕は直刻関山峠を越して山形に赴いた。ゴザを着て蜂章（蜂の形をた副高の帽）の帽子を冠り風に逆らつて走るときは、まるで維新の志士気取りであつた。其時分には詩吟が流行した。米沢から来た故人の山崎君などは高等学校に行つてからも詩吟で鳴らしたものだ、謡ふものは悉く維新志士の慷慨歌、学校の唱歌などはいやでく、たまらなかつた。在学中殊に上級生になつてから不埒な学生を擲つて、所謂鉄拳制裁を振り回したのは二度や三度ではなかつた。随分乱暴をしたものだが、先生方もよく大目に見て下さつたと思ふ。否かかかる事を当時はむしろ陰に奨励せられたのではないかと思ふ。へ 中略 へ中学に入るとき初めて入学試験といふものを、郷里に近い高島の郡役所で、平田重兵衛君などといつしよに受けた。生れて初めての入学試験で、そして後にも、前にも、唯一一度（その後、**二高**、**東京帝国大学**に進むがいずれも成績**優等**）の入学試験だ。（僕等は仕合せ者だ）ビク／＼しながら幸ひ及第して、山形へ来て八里（**赤湯山形間の約20kmを、まだ鉄道が通っていない**）この途をいつもテク／＼歩いたものだ。県庁の（**現在の文翔鳳**）前通りの当時にしては堂々たる師範学校の向側にあつた、汚い汚い学校（**聖の聖の非劣辺り、元は勸業博物館**）（校舎が汚いと生徒は偉いなどといふてゐたものだ）門を入り、生徒控所にキヨロ／＼して、まづ入学者の張出しを見、次に其年の卒業生の張出しを見た。そのとき首席で出た人は六つかしい名前の人だと思つた。後で考ふれば藤井健治郎君（明治24年、**倫理著**・**京大教授**）であつた。自分は赤湯高等学校を卒業して、日本外史などスラ／＼読めたのに、其時分の文字の程度が低かつたものだと思ふ。それが中学で教育されて、どうにか一人前になる有難いことだ。（**其高倉雜誌一九四六年**）

## 「獨り大雄峰に坐す」「至誠奉公」

講演を終えた結城は、扁額と国旗掲揚台への揮毫を請われた。扁額には経典『碧巖録』の一節から「獨坐大雄峰」を、そして掲揚台には「至誠奉公」と一氣に書き上げた。

「大雄峰」に向かい「獨坐」する姿に、結城は己を見ていたのかもしれない。日増しに国家統制力の強まる社会情勢、未曾有の恐慌が吹き荒れる中、銀行家と大臣の狭間に置かれた自分は断つた。七月、日本銀行総裁に就任。それから六年半、戦時金融の最高責任者として、軍部の独走を抑制して、金融の中立性を確保するとともに、国民生活を維持するために奔走した。国旗の下に「至誠奉公」と刻んだ結城。お国のために一身を捧げる「滅私奉公」よりも、国民のために圧力に抗い己の信じる誠を貫いた人生だった。「奉公」と「Be Ambitious」——矛盾にすら思えた二つの生き方は、結城にとつてはまさに表裏一体の生き方であつたのだ。見送りの写真が残る。制服制帽にゲートル姿、直立不動で見送る生徒達。歩きながら会釈を繰り返す結城。大臣になつたくらいで大騒ぎしなくていいと、赤湯での歓迎行事を断つた結城には、少し面映ゆかつたにちがいない。



中原校長



結城が入学した明治 24 年当時の校舎

\*ストライキ  
一八九八年（明治31）一月、就任まもない市瀬禎太郎校長は懇懇と生徒心得を諭し、自らも行いを慎むべく宣言したが、椅子に寄りかかり挨拶したこと等から言行不一致の偽君子と非難され排斥運動が起こつた。県からは生徒の処分勧告がきたが、校長は「僕の不徳の致す所で生徒に罪はない」と、勧告を斥け辞表を提出してしまつた。校長には痔病のために椅子に座れない事情があつたのだ。それを知ると、生徒達の態度は一変した。



生徒達の見送りを受ける結城（1937年）



「獨坐」の扁額（正面階段）